

# Miku la Chic

## ユメのカレノ

Op.11

## 'Bagatelle, Op.126

作曲 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン  
Ludvig van Beethoven 1770-1827 1824年頃

— 創作日本語歌詞による —  
2022年12月7日 第1版

あぁ あなたの声 響けば  
おはようの朝に 魔法の世界 拓く

あぁ あなたの顔 浮べば  
芦原の風に 希望の音が 響く

デコボコ道 ホロホロ道

あぁ～、 誰もかれも 泣いて泣いて  
追いかけるの 夢の枯れ野  
るるる～ るらるら～

あぁ～ らら、  
五月雨の空 光り輝く カプセルみたい

夏が終わる 蝉時雨が

あぁ～、 ないてないて、、、  
駆け巡るよ 夢の枯れ野  
るるる～ るらるら～

あぁ～ らら、  
黄昏の空 やがて悲しい パステルみたい

さぁお休み

あぁ、まぼろし  
阿咩

#### ◎制作ノート

ベートーベンの最後のピアノ曲とされる『6つのバガテル』作品126の最終曲は不可解で謎多き構成、というのが最初のインプレッションだった。日本語に馴染んだ耳にはバガテルという言葉の響きがなんとなくしっくり来ないところが無きにしも非ずだが、バッハの作品名になぞらえれば一種のパーティータなのだろうから、ベートーベン辞世のパーティータの最終楽章とでも書いてみると、自ずから聴く人の耳も正座するに違いなさろう。

では、いかなるポイントが不可解といえ、まず、冒頭と結尾が同じなこと。結尾をフィナーレという風に捉えるのを躊躇ってしまわないだろうか。それから曲の展開には単純な切れ目があって繰り返されているにもかかわらず、劇的なあるいはヴィルトゥオーゾ的な滑らかさでもって華麗にうねらせ主張したりせず、むしろ控え目で初心的なノート並びになっているように感じられること。そして、何小節にもおよぶ単調な「トテトテ」というたどたどしい歩みの模倣のようなバスラインの上に、単純なスケールの上昇と下降が組み合わされている点がどうにもひっかかか。どこをとっても引き算の総決算、あるいはテクニク的な故意のデチューン、あるいは服装であればカジュアルダウンしたような趣きのなだ。巧みに織り上げられた同曲の3番とか5番の楽想をトドメのフィニッシュに持ってきたもよさそうなのに、なにゆえにこの曲が終曲、なにゆえにピアノを愛したベートーベン最後のピアノピースだったのか。

こうしたインプレッションを30年くらい引きずりながら、ヴォーカロイドによる歌詞を当ててみようという気持ちになったのはただの偶然。しかしながら、日本語を当てていると、メロディラインに馴染む音節とそうでない音節は自ずと意識され、そうこうするうちに楽音のサビの部分に歌詞のサビが同調してくるタイミングというのがたいていある。そしてその

ステージに来ると具体的なイメージが湧いてくることも多い。ストーリーと言ってもよいだろうか。そしてこの曲で最初に下りてきたのは勿論「ないてないて」の部分。この最初のピースがじっくり嵌まり込んだらこっちのもの。あとはオートマチックに、ベルトコンベア式に言葉とストーリーが勝手に組み上がってきたりする。そこを越えると苦しみから解放され、曲の世界に最初の一步を踏み出すことができる。

このキーワードからすぐに浮んできたストーリーが、松尾芭蕉の辞世の句である「旅に病んで 夢は枯れ野を かけめぐる」だった。その次になすべきことは、どれくらいの密度のストーリーでどれくらいの言葉を詰め

込むかを考えることなのだが、その先は曲のコンセプトに沿ったものでなければならない。簡単な内容をグダグダ解説してもダメだし、複雑な内容を寸足らずにして十分伝わるはずもない。そもそも、どんな内容を伝えるかという動機に、メッセージがじっくり同調しなければ、この歌をもう一度聴いてみようという気持ちになるはずもない。従って、歌詞からみた曲の展開は、ベートーベンが思い描いた動機にどこまで迫れるかにかかってくる。すでに亡くなった作曲者本人の言葉を聴けない以上、動機の探索は、曲を噛砕いて味わって飲み込んでいかなければならないだろう。

そのポイントは勿論、この曲が不思議に思える点に集約されている。そ



して「トテテ」というのが人が歩く様子を模倣しているという仮説から連想を拵げていけば、単純上昇と単純下降は人生の浮き沈みをシンボライズしたもので、冒頭と結尾の単純同一性は人間の生の輪廻を暗示している、などと解釈できそうである。また、楽想の展開がいつのまにか暗くなったり明暗が付けにくかったり、急展開したりすることも、やはり人生の苦節歎喜、喜怒哀楽に一脈通じているとして、楽想をトレースできそうである。芭蕉の辞世の句は、死の直前まで理想を求め、涸れない井戸のごとき創作意欲を、これ以上ない形で打ち出している点が、まるでベートーベンが最後の最後までピアノ曲の構成と発想と世界観を追い求めている姿の二重写しに思えたところから、歌詞をそのようなダブルビジョンにできないものだろうかと思っただけである。

ということで、歌詞の内容は、伝えたいメッセージを二重三重に写し込んで見えるよう頭をひねった。ベートーベンがシンプリシティを強調した点は、平易な言葉を使うというポリシーに置き換えた。人の人生を写し込んだという点は、誕生と死のイメージを対比的に配置することで表現した。自分の世界観を追求するという作者の生き様は、芭蕉の句を借りることで折り込んだ。多重写し構造については、次のような入れ子的な構造で実現している。

生命の始まりと終局 → <おはよう><お休み>という挨拶 (=声)

人生の始まりとおわり → 魔法の世界拓く、黄昏の空

世間の厳しさと理想郷 → 芦原の中つ国の<風>と<夢>

生まれる音と消える音 → 阿吽

輪廻構造 → 師匠の声が弟子に響けば世界(芦原)拓く、

(芦原にもまれた) 弟子が尊顔を思い出せば師匠の声が心に響く

そら=空=高天原=芭蕉の弟子<河合曾良>

擬音

人生の厳しさ → デコボコ道 (視覚表現)

人生の悲しさ → ホロホロ道 (感受性表現)

さてもう一つ、和風の歌詞の中にカタカナ語を二つ入れたのは、西洋と東洋の混淆を狙ったものである。パステルが視覚効果、あるいは空を見上げることによって俯き加減なイメージが晴やかになったという身体効果を折り込んだというのは分かりやすい、というかよくあるテクニクである。ではどこからカプセルという概念が突如降って湧いてきたかについては一言書いておいたほうがよからうかと思う。

これはさして新しくもない単純なはなしで、メーテルリンクの代表的な詩集『温室』の象徴としてのキーワードである「温室」である。日本語で温室というとなんとなく平和だしパンチもなく、「ん」まで入っていて音響効果も薄れるために「カプセル」を試している、というもある。この温室を説明せよと言われてもなかなか難しいし、大上段に説得できるほどの素養もないのでかいつまんでいうと、政治的文化的な国境・境界線・結界・バウンダリーというような目にみえる断絶と精神的な断絶が入り交じって現出しているような諸々、そういう形而上な概念混じりの状態・ビジョンをボソッと平凡な単語で表現したもの、というのでおそらく核心は外していないと思う。

初出：令和四年十二月七日

**DAW : PreSonus Studio One 5 Artist**

**ヴォーカロイド : 初音ミク NT**

**メイン・インストゥルメント :**

**IK Multimedia - Miroslav Philharmonic 2CE**

**Soniccouture - Ondes, Celesta, All Saints Organ**

**UVI - Finnish Concert Kantele**